

幼馴染の妹の家庭教師をはじめたら

疎遠だった幼馴染が怖い

すかいふあーむ



ファンタジア文庫

3003

幼馴染の妹の 家庭教師をはじめたら

疎遠だった幼馴染が怖い

**osananajimi no imouto no kateikyoushi
wo hajimetara**

soendatta osananajimi ga kowai

口
絵・本文イラスト
葛坊 燭

「なに？」

そう言つて俺を睨む幼馴染の頬が赤らんでいた意味に、俺はずっと気づいていなかった。だつてまさか、俺のことを好きだなんて、考えもなかったから。

プロローグ 幼馴染が怖い

高西愛沙。

学年で一番可愛いのは？ と男子に聞いたら、十人のうち八人くらいは高西愛沙と答えると思う。

実際幼馴染の鼻眉目なしにみても、かなり顔立ちが整っている。スタイルもよく、勉強もできて、運動もそこそこできて、非の打ち所がない。

そして誰にでも分け隔てなく優しい。ただし、俺を除いて。

「なに？」

「いや……なんでもないです……」

眺めていたのがバレたのか声をかけられた。夏の暑さを吹き飛ばすくらいには冷めきつた声で……。

本来大きい目をこれでもかと細めてもお、
「美人だなあ」という感想が自然と沸き起こるくらい、愛沙は美人に成長していた。

肩まで伸びた艶のある髪をさらさらなびかせている姿も画になる。

俺なんかもう、モブどころか背景もいいところと言えるくらいには。

これだけの接点で「なんで高西があいつに……？」という声がかかるくらいには俺と愛沙との間に大きな壁がある。俺が悪いんじゃない、と思いたい。単純に愛沙が人気になりすぎ、目立ちすぎるようになってるわけだ。

「そう……」

それだけ言っただけ自分の席に戻っていく愛沙と入れ替わりで前の席から声をかけられる。

「なあ、お前高西さんと幼馴染なんじゃねえのか？」

声をかけてきたのは滝沢暁人。

こいつはやる気のなさそうなボサボサの髪を隠そうともしないくらいには自分のことに無頓着なのに、もとの顔立ちがいいだけでモテる憎たらしい男だ。いや外行きのときはまた違うというのを知ってるんだけどな。

モテる以外のところはなんだかんだ馬が合うので、なんで仲良くなったかは覚えていないが仲良くしている。

「親同士が仲いいだけだな」

愛沙とは小学校までは本当に仲が良かった。と、俺は思っている。

親同士が仲がいいことで、よく一緒にでかけていたし、愛沙自身もまあまあ馴染んでいてくれたと思う。

今となつては親同士が仲のいいだけの遠い存在になってしまったわけだが。

「なーんか、やたらお前を見るとときだけ視線が違うよな」

「恨まれるようなことした記憶はないんだけどなあ……」

中学に入ったあたりからすれ違っていった気がする。

俺にはわからない決定的なすれ違いがあつて、いまじゃこれだ。

誰にでも人当たりの良い学年のアイドルが唯一笑顔を見せない相手。それが俺。

「あれ、恨んでる感じには見えないんだけどなあ……」

暁人はそう言うが、あの視線を見て他にどう解釈すればいいというのか。

「なんでだろうな……」

「他の人はこう、完全に他人って感じで接してるだろ？ 高西さんって」

「そうか？」

あの容姿だ。男からのラブコールは止む様子を見せていないし、かといって相手を作る気が一切見えないため女性陣から疎まれることもない。それどころかむしろ、性格の良さとかスペックの高さから女子の人氣も高い。今も机の周りにはいわゆるスクールカースト上

位の男女が彼女を囲んでいる。

「ほら、あれ見ててもさ、なんとなく壁があるというか、距離があるというかさ」

「そうか？ 俺には人気者たちが楽しそうに話してるようにしか見えない」

交ざるのも怖いしなんなら見るのも怖い。一人でいた愛沙を眺めているだけで冷たい声をかけられざわつかれるのだから、あんな眩しい集まりは直視するのとはばかれる。

「ま、お前がそうなら俺はいいけど」

よくわからないことを言って暁人はまた机に突っ伏していった。いまから授業が始まるというタイミングでこれだから結構なご身分である。

暁人から視線を外すと、クラスメイトに囲まれてにこやかに微笑む愛沙とまた目があう。それまでにこやかに話をしていたというのに、俺と目があった途端凍りつくかのような冷たい視線で睨みつけられた。

「はあ……」

ま、もうこれから接する機会もほとんどない相手だしな。

なにか悪いことをしてたなら謝りたいが、嫌われていたとしても困ることはないだろう。そう気楽に考えられていたのは、まさに今日このときまでだった……。

幼馴染の妹の家庭教師

「ごめんなさいねえ。わざわざ」

玄関を開けると、愛沙のお母さんが出迎えてくれた。

久しぶりに見たが、ふんわりパーマच्छくな髪の毛と穏やかな表情はあの日のままのようを感じる。時の流れこそ感じるものの、うちの母と違って太ったりおばさん化はしていない。

というか普通に美人だった。このあたりはさすが、愛沙とまなみの母と言えるかもしれない。

「ご無沙汰しています」

「あらあ、昔みたいにただいまでいいのよ？」

幼馴染の家に来るのは何年ぶりだろうか。

なんでも妹のまなみが勉強で困っているらしく、俺がその助っ人に呼ばれたらしい。らしいというのは、家庭教師になることは俺の意思に関係なく親が勝手に決めたことで、気づいたらここに送り出されていたという経緯に対する、ささやかな抗議である。

俺と愛沙が疎遠になつてからも親同士は仲が良いために起こつたある意味事件^{ハプニング}と言つてもいいかもしれない。

そのせいだろう。愛沙の機嫌^{きげん}はすこぶる悪い。

「お邪魔します」

「……」

玄関に足を踏み入れると、廊下^{ろうか}の先で腕^{うで}を組んでこつちを睨^{にら}んでいる愛沙がいた。怖い。

「わあ！ 康貴^{こうき}にいい！ 久しぶりー！」

と、階段からまなみが現れる。

ドタバタ降りてくる様子にどこか懐かしさを感じてほっこりしていると、勢いそのままに飛びついてきた。

「ぐふっ……！」

愛沙も目をバチクリしてびっくりしてるじゃないか。このおてんば娘^{むすめ}め……。

なんだかんだ懐かれていた記憶はあったが、まさかいまだに抱きついてくるほどとは思つていなかった。姉ほどではないにしても色々成長しているし、そもそも一つしか学年が違わない相手はもう十分大人な身体^{からだ}なわけだから、もう少し中身もそれに伴^{ともな}つて成長してほしかった……。



「久しぶりー！」

なんかまなみが来て愛沙が一段階怖くなったぞ。

多分妹をお前なんかには渡すかと思ってる！ 俺にその気はないから離れてくれ。

「えへへー。康貴にい！ ほんと久しぶりだね！ 最後に会ったのはいつだったかなあ」

全然こちらの意図を汲み取ってくれないまなみに抱きつかれたまま、愛沙には睨まれ続ける。

おぼさんだけはニコニコと、その様子を楽しそうに眺めていた。

「大丈夫か？ 勉強やばいって聞いたけど」

「もー！ つまんないこと言ってるでさー、こんな可愛い子が抱きついてるんだから少しくらいドキドキしてくれてもいいと思うんだよねー？」

自分で言うなと思うものの、確かにまなみも整った顔立ちをしている。

清楚で正統派美少女の姉と比べると、好奇心で輝いた目や少し短い髪が年齢差以上に幼さを感じさせる。ただそれでも可愛いことには間違いない。学年を隔てても話題になるくらいには。

「とりあえず一回離れろ」

「一回ってことは、この後お部屋で抱きついてもいいんだよね!？」

俺に抱きついてても楽しくないだろ。お姉ちゃんがすごい顔で見てるからやめなさい。

「相変わらずまなみは康貴くんべったりねえ」

「さすがにこれはやりすぎだと思っただけだね……」

愛沙は遠くでこちらを睨むだけで何も言葉は発していない。というのに恐ろしい圧は次第に凄みを増している。ただその圧はどうも俺にしか届いていないらしく、まなみは好き放題だった。

頼みの綱のおぼさんも「あらあら」と柔和に微笑むだけで止める気はないらしい。

いいのか、嫁入り前の娘がこれで。

「ほらほら！ 早くお部屋行こ！」

「わかった、わかったから」

離れたと思ったら今度は手を取って階段へ引く張るまなみ。

お前が俺に触れるたび愛沙の顔がすごいことになっていってるからな!？」

前途多難な家庭教師生活がスタートした。



「第一回！ 康にいの勉強大会！ いえーい！」

「勉強するのはお前だからな？」

わかっているのだろうか。

目の前にいるやたらテンションの高い生き物を見つめて心のなかで問いかける。本当にこいつ、愛沙の妹なんだろうか。

いやまあ俺にとつても妹みたいに接してきたし、まなみもまなみで俺のことは兄のように慕っている……と思う。

むしろ普通の兄妹より仲がいい、というか……スキンシップが激しい気もする。その癖がこの年齢になつても抜けないことはさつき実証されていた。

「久しぶりだねえ！　ほんと！　お姉ちゃんは学校で会えるからいいけど、私は寂しかったんだよ？」

上目遣いで見つめるまなみも、さすがに愛沙の妹だけあつて美少女だ。同級生相手ならイチコロだと思う。

俺はもうなんか、慣れたというかまなみをそういう目では見られなくなっているのだから助かっているが、ここまで成長されてしまうとそろそろ危うい気もしてくる。愛沙の鬼の形相を思えば絶対に手を出そうなどとは思わないわけだが。

「せっかく一緒に学校入ったのにさあ、全然お姉ちゃんも康貴に何も会えないし、勉強は

ついていけないし……」

しょぼんとうなだれるまなみの頭を撫でる。

「まあ、そもそも入れたのが奇跡だったからなあ」

姉に似て顔立ちはいいのもの、勉強は姉に似ずだめだった。

その分運動は愛沙より得意で、歳上の男である俺と張り合える運動神経の持ち主だったりもする。外で遊ぶときは必然的に愛沙よりまなみという時間が長くなったのも、まなみが俺に懐いてくるきっかけになったかもしれない。

勉強も平均よりはできていたんだが、全員がある程度できるところに進学したわけだ。苦しくもなるだろう。

「まあでも、康にいが来てくれたからダイジョブ！」

「姉に習うって考えはなかったのか」

「もちろん最初はお姉ちゃんに頼んだんだよ？」

「え？　そうなのか」

だったらそれで解決しそうなもののに。

愛沙は学年でもトップクラスの成績。対して俺は中の上といったところだ。絶対愛沙のほうが適任だと思う。

「お姉ちゃんねえ、身内にすごく厳しいから……」
 遠い目をするまなみ。

まあなんとなくわかるし、身内同士だとやりづらさがあるんだろうな。

「お姉ちゃんもお姉ちゃんでなんか、私相手だとムキになっちゃうって言ってた。それでお母さんが康貴にいの名前を出してくれて、お姉ちゃんもそれならって言って決まったんだよ？」

「ん？」

愛沙が良いって言ったのか？

「それより康貴にいい！ ちゃんとお姉ちゃんの相手してあげてる？」

俺の疑問は落착着きのないまなみによって解消されることなく流されていった。

「愛沙の相手……？」

「なーんかさ、せっかく同じクラスになったっていうのに全然康貴にいの話してくれないし」

ああ……。まなみの中ではいつまでも俺たちは仲のいい幼馴染なのか。

「最近はあるまり話してないからな」

「だめだよ！ そのせいでお姉ちゃん、いつも機嫌悪いんだから！」

それは別の理由だと思うけど……。変な男に絡まれて愚痴ってるのはクラスでもちよこちよこ見ている。

それこそ俺から声でもかけようものなら、クラス中に身の程知らずのバカが勘違いして声をかけてきたと噂されてしまうに違いない。

「とにかく！ 康貴にいいお姉ちゃんの相手をする義務があります！ 結婚まで約束してたんだし！」

「懐かしいなあ」

よくある幼馴染の例にもれず、そんなこともしていた。ただまあ、今の状況を考えればそんなもの意識しているのはまなみだけだろう。

「ま、そろそろやろう」

これ以上掘り下げるとまなみに真実を伝えてシヨツクを与える可能性もある。

いずれ伝わることはあると思うけど、先延ばしにできるならそうしておきたかった。

「もー。あんまり真剣に聞いてないな？ とにかく！ もっとお姉ちゃんを構ってあげて！」

「はいよ。まなみが勉強頑張ったらな」

「あ！ 言ったなー？ 私はやればできるんだからね！」

「知ってるよ」

俺たちの後を追いかけるために必死に勉強してきたことも、それがどれだけ大変だったかもな。

「むふー。じゃあよろしい」

「なんでお前が偉そうなんだ」

「えへへ」

軽く小突いてやると楽しそうに笑う。昔からこんな感じだな、まなみは。

「やるぞ。まずは数学だな？」

「よろしくおねがいします！」

アルバイトということでお金までもらっているわけだから、気合を入れてやろう。頑張り屋のこの子がしっかり報われてくれるように。

愛沙の想い【愛沙視点】

高西愛沙は戸惑っていた。

「なんであいつが家に……」

バクバクする心臓の音が、隠しきれない。

「今の今までぜんぜん話もしてなかったのに……!」

突然来るなんて不意打ちが過ぎる！ お母さんもまなみもこうなることをわかってて黙ってた……。絶対。

なんかニヤニヤしてたし。

「そりや確かに！ 康貴が家庭教師になるなら良いんじゃないとは言ったけど!」

冗談だっと思うじゃん！ あいつもあいつでそんなはいはい受けるだなんて思わないし！

「ううー!」

いつものくまのぬいぐるみを八つ当たりするようにぎゅつと抱いてベッドに転がる。

康貴のことを考えれば考えるほどなんか、頭の中がごちゃごちゃしてきて、ちよつとモ

ヤモヤする。

今だってきつと、隣の部屋でまなみとベタベタしているに違いない。私とは目があっても一声もかけてくれなかったくせに、まなみには抱きつくことまで許している。

私には一声もかけてくれなかったくせに！

「いつからこうなったのかなあ……」

もともと康貴は私と仲良く遊んでたはずだった。

それがいつの間にか、まなみも一緒に遊ぶようになって、気づけばまなみに全部持っていかれた。

いや、それは多分私の思い込みで、実際はそんなことはなかったんだと思う。それでも、なんか取られちゃった気がしてモヤモヤして、それが未だに残ってるんだ。

だからこうして家にまで来ていてなお、話すらできない。これじゃ同じクラスってだけで話ができないのだって、当たり前だ……。

「私のせい、だよね……」

康貴は優しいから私に声をかけてくれてたけれど、私が意地を張って突っぱねたことも多かったかもしれない。気がする。そうじゃないと思いたい。いや認めよう、そんな気がする……。

「はあ……」

いや、でも結局あいつは最近私のことを避け始めた！ せっかくまなみと学年が違ったら、ちよつと、一年だけでも、また私だけの康貴が帰ってきてくれるかもって、そう思ってたのに……。

私も悪かったことがあるとすれば、あいつが話しかけてきたときに緊張して表情が硬くなるくらい。だと思ふ。あとはそんな、特に悪い態度を取ったつもりはない。

ないよね？ 多分ない。

「やっぱクラスも一緒なのに、あいつがそっけないのはだめだと思うんだよね」
もう随分くたびれたくまのぬいぐるみに話しかける。

もちろん自分でもわかってた。自分のせいでこの状況になっていることは。

でもそれを認めたら、何か全部がだめになる気がして、結局家にまで来たあいつに声をかけられずにいる。

「もうちよつとなあ……。まなみみたいに、素直になれればなあ」

自分の性格は自分が一番よくわかっている。それが叶いもしない願いだということは重々承知だ。

でもその上で、もしそれができたら、あいつは私にちゃんと振り向いてくれるんだろう

か……？

「あいつ以外に好かれたって、意味がないのに……」

康貴をまなみに取られたと感じてから私は、ずっとあいつに振り向いてもらえるように努力してきたつもりだ。そのおかげかどうか、最近はあるとよく声もかけられるようになった。康貴以外の男に。

「もしかして、好みじゃない……？」

そんなことはない。あいつのことは誰よりも見てきたんだ。

一生懸命スタイルを良くしてきたし、髪型もあいつの好みのはず……！ 顔はどうしようもないけど、あいつが嫌いな顔ではない……はずだ。

なのに……。

「はあ……」

こうしてる間にも、まなみは楽しく康貴を独り占めしてるんだろう。

そう思うとなんかムカムカしてくる。あいつはきつとまなみにくつつかれて鼻の下を伸ばしてるに違いない。

まなみもまなみで、ちょっと多分、わざとおっぱいを当てて誘惑したりしてるかもしれない。

「いや、それはないか……」

まなみは純粹に、康貴が来たのを喜んでたと思う。

でも……。

「おっぱいなら、私のほうがあるもん……」

そんな届きもしない想いをくまにだけぶつけて、いつものように抱きしめてベッドに転がる。

「いいなあ……まなみ」

抱きしめたくまのぬいぐるみは、今となつては数少ない、あいつからのプレゼントだった。

クラスのアイドルと勝利の女神

「お前、高西^{たかにし}家に行ってるってホントか？」

「誰から聞いた？」

「今日も話し相手は暁人^{あきと}だ。」

「いや、噂^{うわさ}になってるぞ」

「え……？」

クラスの、いや学年のアイドル高西^{あいにさ}愛沙の家に同級生の男が出入りしているとあればまあ、噂になるのもわかる気はする。そうか、でも噂になってるのか……。

「まずいな……」

「やっぱ行ってるのか」

ここまでバレているなら言っただほうが良いだろう。

「実はさ、妹のほうに家庭教師をしてる」

「なんだと……。お前、高西妹にまで手を……」

だるそうにしていた暁人がガバツと身を乗り出してくる。

「いや待て、どっちにも手を出した覚えはない」

「でもなあ……」

幼馴染^{おとななじみ}だとか親同士が仲がいいとか、今の俺と愛沙の関係しか知らない同級生たちには言っても無駄^{むだ}だろうからなあ。でもまあ、噂^{うわさ}を沈静化^{ちんじやうか}するためには家庭教師の話も同時に広めたほうが良い気はする。

「ま、俺もお前らの関係とかわからんけど、もちっと話してみてもいいと思うんだけどなあ」

「いや、あの様子を見て、声かけられるか？」

今も俺が視線を向けるとすぐさま避けるように顔を背^{そむ}けられたくらいだ。

「顔を背けるってことはさ、それまで見てたってことなんだけどなあ」

「教室も狭^{せま}いんだし、見えるのは見えるだろ」

「ま、お前がそう言うんならいいんだけどなあ……」

飯に見られていたとしても、「お前のせいで変な噂が立ってるんだぞ」という非難の視線^{ちが}に違いな。

「ところで高西妹ってさ、あの高西だよな？」

「あのつてのがなにかわからんけど、まあ話によく上ることは間違いない」

学年をまたいで噂になる美少女というのが話題に上る一因だ。もちろん、姉の存在も大きな要因ではあるが、それ以外にもう一つ、妹のまなみが有名な理由は他にもあった。

「勝利の女神だよな？　すげえな。勝利の女神とアイドルの家に合法的に通ってるのか、お前」

「合法ってなんだ……」

——勝利の女神

まなみに付けられたあだ名だ。

文字通り勝利や幸運をもたらす存在だが、まなみの場合は応援ではなく自力で勝利を手繰り寄せる。

運動部の助っ人に入るとどんな部活でもレギュラーを押しつけて大活躍を見せる。まなみが助っ人に入った試合はほぼ負けなし、というと誇張があるが、かなり高い勝率をキープしているようだ。結果、いつの間にか勝利の女神としてうちの学年でも名前を聞くようになっていた。

さすがに小さい頃から男に交ざって暴れてただけある。

「勝利の女神の方はともかく、あっちには歓迎されてるわけじゃないからなあ」

愛沙に憧れを抱く男子に昨日の顔を見てやりたい。一部のマニア以外は恐怖で震える

こと必至だ。

「ま、女に関しては俺のほうが先輩だから言わせてもらおうとだな」

「ハラタツなそれ」

暁人の憎たらしいボサボサ髪を小突く。

「良いから聞けつて。きつと高西も話したいとは思ってるつて」

「そうか？」

「じゃなきゃ興味がないように振る舞うはずだ。他の奴らと同じようにな」

話半分にしか聞くつもりはないが、こと女絡みに関しては暁人の言うことはある程度信憑性がある。

校内で愛沙のように目立ったモテ方をする人間ではないが、それでも暁人は俺より経験が豊富なことは確かだ。悔しいことに。

「その話したいことが良いことか悪いことかはわからねえけどな。でもなんかしら、話したいことがあるからああいう態度なんだと、俺は思うね」

「なるほど」

一応覚えておくか。

「ま、見てる感じじゃ近いうちに話すことになんだろ」

「ん？」

「ほれ、移動教室だぞ。次」

「ああ」

暁人の予言じみた言葉がなぜか、その日は頭にずっと残っていた。

愛沙の唐揚げ

「まなみー！ 康貴くーん！ そろそろ降りてらっしゃーい」

「はーい！」

「こら！ キリが良いとこまでやってから……って聞いちゃいないな」

まあ二時間も集中してたら十分か。

もう家庭教師も何度目かになるが、まなみは集中が持続する時間は短いものの、一旦やり始めれば普通に平均点を超える力があることはわかった。

現状が赤点すれすれをさまよっているのは、集中するポイントがわからず何から手を付けていいか迷走していたせいだろう。

まなみを追いかけて下に降りると、おばさんから晩ご飯のお誘いを受けた。

「ま、もう康貴くんのお母さんにも連絡しちゃったから、うちで食べないとご飯がないんだけどねえ」

「喜んでいただきます」

拒否権はなかった。

となると当然、こいつとも食卓しょくたくをとにもすることになる。

「なに？」

「いえ……何もないです
怖い……。」

本当に俺何かしたんだろうか……。今度まなみに聞いたほうがいいかもしれない。
いやでもまなみはまなみで「寂さみしがつてる」とかよくわからないことを言っていたので
頼たのりにならない。

考え込んでいるとニコニコしたおばさんが声をかけてくる。

「ふふ……。久しぶりねえ、康貴くんがここでご飯食べるの」

「そうですね」

「もう。康貴くんの敬語が聞けるなんて思いもしなかったわー、あたし」

本当に久しぶりだ。昔は高く感じたテーブルが今では低いくらいになっていて驚おどろく。

一方で、それだけ久しぶりでもここから見た景色を忘れないくらいには、当時はしょうちゅうここに来てお世話になっていた。

「康貴くんが久しぶりに来るからって、愛沙が張り切ってねえ」

「え？」

「ちょ！ ちよつとお母さん!？」

何を張り切ったかわからないけど久しぶりに素の愛沙を見た気がする。

学校だとおしとやかなキャラになってるけど、昔はこういうの、よく見てたなあ。なんだか懐なかしい。

「良いからほら、準備して!」

顔を赤らめておばさんを急せかす愛沙。愛沙自身もテキパキと食器を出したり準備を進めている。

一方まなみは椅子いすの背もたれにこれでもかというほど身体からだを反らせてぐったりしていた。
愛沙と比べればささやかながら、その体勢になると胸が目立つからやめてほしい。

「もうだめ。つかーれーたー!」

「あらあら。康貴くんがしっかり勉強しやうけんさせてくれる証しやうこ拠こね」

「それはまあ……」

まなみがぐったりするくらいには仕事をしていることをアピールできたところで、俺も
なにか手伝えないかと席を立つ。

「えつと、俺もなにか」

「あんたは座まってて」

「はい……」

間髪入れずに愛沙の冷たい言葉が飛んできた。お前をこの家で自由にさせないという強い意思を感じる。

「あははあ。康貴にいい、役立たず」

「何もしようとすらしてないまなみに言われたくはない」

「その通りね。ということでもなみはさっさとご飯をよそって」

「え。墓穴だった」

そうは言いつつそのその動き出すあたり、なんだかんだまなみはいい子だった。いい家族だ。

ほどなくして準備が整い、四人で手を合わせて食事を始めたところでおばさんが声をかけてくる。

「そうそうー。それでね、康貴くん」

顔を上げるとお箸を持ったまま楽しそうに微笑むお婆さんがいる。

「この子ねえ、今日康貴くんがうちで食べていくってわかったら、張り切っちゃってねえ」
「——!!」

さっきの話の続きらしい。

愛沙は唐揚げを口に咥えているせいで止めることができず、あわあわとお婆さんところらを見つめて、最後に俺を睨みつけた。

ただ、今回は口に唐揚げを咥えたままという間抜けな顔だったので、どれだけ鋭い目つきでも怖くはない。むしろなんか、可愛らしさすらある。顔も赤いしな。

「今日もほら、康貴くんが一番美味しそうに食べてる唐揚げ、この子がね」
そうだったのか。

驚いた顔で唐揚げと愛沙を見比べる。

「お母さん！ 怒るよ！」

「あらあら」

顔を真っ赤にして暴れる愛沙。急いで唐揚げを飲み込んだらしく慌ててコップに手を伸ばしている。

「なによっ！」

そして怒られた。怖い。

でも一言、これだけは言っておいた。

「いや、えっと……美味しいなって」

褒めたら更に顔を真っ赤にして目をそらされた。

お前と話すことなど何もないとでもいうかのようだ。

ただ、愛沙がわざわざ作ってくれたというなら、一言くらいはお礼を言いたくなった。

「ありがとな」

「どういたしましてっ！」

ぎこちないながらも、久しぶりの会話が成立したかもしれない。

その後はなぜか見張られるようにちらちら確認されながらご飯を食べることになって少し居心地が悪かったが、愛沙の表情はどこかいつもより柔らかく感じられた。

高西家の作戦会議【まなみ視点】

「お姉ちゃん、素直じゃないなあ」

嬉しいのと恥ずかしいのとで顔が真っ赤なお姉ちゃんに話しかける。

ほんとにもう……素直じゃないなあ。

「うるさい！」

「でも良かったね、美味しいって言ってもらえて」

「それは……うん……そうだけど……」

顔を真っ赤にしてクツシヨンに沈む姿。こんなの男に見せたらイチコロだと思う。康貴にいても多分、そうだ。

妹の私でさえちょっとドキツとしちゃうんだから。

このあたりはさすが、私の学年にまで噂が流れる超絶美少女の姉だけある。私にもこのくらいの可愛さがあつたら、康貴にいてもうちよつとちゃんと見てくれたかなあ。

ま、今はお姉ちゃんの方に集中しなきゃだね。

「もうちよつと素直にならなきゃねえ」

「わかつてるわよっ！」

わかつてない様子で応えるが、目に涙を浮かべているので精一杯さは伝わってきている。

「なかなか素直になれないお姉ちゃんのために、私が一肌脱いであげましょう」

「嫌な予感がある」

「失礼なっ！」

人の善意を何だと思ってるんだこのお姉ちゃんは！

「私、康貴にいい勉強教えてもらってるでしょ？」

「そうね……。私は声すらかけてもらってないのに……。まなみは……」

あ、なんか地雷踏んだ。

まあ面倒だから話をすすめちゃおう。

「で、テスト前はほら、康貴にいい勉強しなきゃだから来ないんだけど」

「え、来ないの……？」

ほとんど話してないどころか来ても睨みつけて威嚇してるだけなのに、来るのは楽しみにしてたのかあ。重症だなあ……。これ。

ま、今はいいや。

「でもね！ 勉強会ってことなら、来てくれるんじゃないかなあと思って！」

「勉強会……？」

うつむいていた顔が上がる。

うるうるした上目遣い。ほんとにもう、これ見ただけで康貴にいいイチコロだと思うんだけどなあ。

そうされちゃうと私の可能性がなくなっちゃうから言わないけど！ いや、もうちょっとアドバイスした方がいい気もするけど……。なんだかんだ言ってお姉ちゃんと康貴にいがくつつくのは、ある意味私の希望通りの展開の一つではある。

ただなあ……。ちよつとは手伝ってあげるけど、決定的なところまで譲ってあげる気にはなれない。私も私で、複雑だなあと思う。

つと、今はお姉ちゃんの話だった！

「そ！ 勉強会！ そしたらほら、お姉ちゃんも自然と交ざれ——」

「ムリムリムリムリ！」

言い切る前に食い気味で否定されちゃった……。

「えー……」

「だって……あいつ私のこと……。嫌いだろうし……」

それは絶対ないだろうけどなあ。

ほんとお互い、こんなのばっかで世話の焼けるお兄ちゃんお姉ちゃんだよな。
「こんな素直じゃないのがいたら居心地悪いだろうし」

そこは否定できないけど。

「勉強も……あれ？ もしかして」

「お？」

なんか急に立ち上がって学校のかばんをガサゴソ漁り始めた。

「あ！ これなら！」

「これ？」

「ノート！ ほら、あいつ今回、風邪引いて休んでたところがあるはず！」

確かに康貴にい、一学期の途中休んでたんだった。

お姉ちゃんが「今日もいなかった……」ってめちゃんこテンション低かったから私まで覚えちゃったよ。

でもこれはいいアイデアだ！

「おー！ じゃあノートを借りるってことで、お姉ちゃんを巻き込めばいいんだね！」

「うん！ そしたらほら、ノートだけでもあいつと勉強できる！」

「え、お姉ちゃんは来ないの？」

それよりノートだけでも一緒に勉強できるってどういうことなの？ 大丈夫？ お姉ちゃん？？？

「私がいたら……あいつ……」

「あー！ もう！ めんどくさいな！ いいからお姉ちゃんも参加！ 強制！」

「でも」

「でもない！ はい！」

「ちよつと落ち着い——」

「返事は！」

「えーっと」

「返事ははい！」

「はい……」

「よし」

このくらいしないとお姉ちゃんはだめだ！

ほんとにもう、この調子ならほんとに、康貴にい取っちゃえるんじゃないかって、思えてきちゃうよ。

「勉強会……あいつと……」

ほわほわと乙女おとめの表情を浮かべるお姉ちゃんを見ると、その気持ちはぐっところえて胸の奥にしまっておこうって、毎回なっちゃうんだけどね……。

勉強会

「お邪魔しまーす」

「あ！ 康貴こうきにいい！ はーやーくー！」

玄関げんかん先で挨拶あいさつすると、上の部屋からまなみと呼んできた。

もうすでに細かいやり取りはなく、直接まなみの部屋に向かうのにも慣れてきている。

元々勝手知ったる人の家というのもあって馴染なじむのは早かった。

ただ、今日は予想外のこと起きていた。

「やつほ！ もう始めてるよ！」

「お、おう……」

予想外は二つ。

一つ目は――

「なに……？」

「いや、何もなない……けど……」

部屋に愛沙あいさの姿があったこと。

相変わらず不機嫌を隠さない表情と冷たい声音で、目を合わさずに声をかけられる。
 なんているんだ……？ 俺が来るの、知ってたよな……？

そしてもう一つの予想外は――

「なあに？ 康貴にい、お姉ちゃんがいるから緊張してるの？」

ニヤニヤ笑うまなみのあまりにもあまりにな薄着だ。

タンクトップのせいであちらこちらの肌が露出しており、ショートパンツがちらつと見えるが角度によっては穿いてないようにすら見えてしまう。

幼いとはいえ間違ひなく美少女ではあるまなみの無防備な姿に思わず反応してしまいそうになって必死に目をそらした。

「……」

愛沙の視線が怖い。現実逃避も兼ねて一旦状況を整理する。

テスト期間に差し掛かったところで、俺の勉強を心配してくれたおばさんから家庭教師はお休みの提案をもらっていた。

ただすでにまなみの家庭教師も予定に組み込んでいたため、やっても問題がないというか、むしろまなみの方が心配なのでどうしたものかと思っていたところで、ちょうどまなみから勉強会の提案を受けたわけだ。で、テストが差し迫る今日、高西家にお邪魔するこ

とになった。

なんだかんだ人に教えることで勉強になる部分が多いので来れて良かったと思っていたんだが……。

「まなみ、気をつけなさい。すごい顔でまなみのこと見てるわよ」

「えっ？ お姉ちゃんがいるから緊張してるんじゃないの？」

どちらも外れではないのがつらい。今の俺にできることは黙って耐えるだけ……。

幸いなことにほどなくして下の部屋から助け舟がもたらされた。

「ごめんなさいねえ。テスト前だっていうのに」

ケーキと紅茶をお盆に載せたおばさんが救世主に見えた。

「いえいえ、良い復習になるので良かったです。すみませんケーキまで……」

「いいのよそんなの。よろしくねえ、いつもの倍いて大変だろうけど」

「私を数に入れないで！」

まなみと同じ扱いに不満を持った愛沙から抗議の声が上がる。
 まあ確かに、一緒にされるのは癪だよな。愛沙の成績は俺より遥かにいいし。

「ふふ……。そうね。愛沙は康貴くんのために一緒にやるんだものね？」

「適当なことも言わない！」

「はいはい。じゃあ三人とも、頑張^{がんば}ってね」

愛沙が怒^{おこ}るがさらりと躲^{かく}して部屋を出るおばさん。矛先^{ほこき}を向ける相手がなくなつたせいか、愛沙の怒^{いか}りはなぜか俺へと向く。

「全然そんなじゃないから。勘違^{かんちがひ}いしないで」

「大丈夫、わかってる」

愛沙が俺のために参加するわけなどないとわかっていることを伝えたが、それでも愛沙の不満は収まらず一層厳しい視線をこちらへ向けていた。

「まあまあ。でもお母さんの言ってるのも、全く嘘^{うそ}ではないんだな」

「ん？」

まなみがそう言うとはツが悪そうにする愛沙の姿が目に入った。

「なに？」

「いえ……」

俺は何も言っていない。

「はあ……。ほら、康貴にい、一学期風邪^{かぜ}で休んだときあったでしょ？」

「ん？ ああ、そういえばあったな」

「そのときのノート、誰^{だれ}かに見せてもらった？」

「一応……。ああそうか。もしかしてそれを愛沙が……？」

休み明けに晝^{ひる}人から借りたは借りたが、あいつは休み時間の終わり間際^{まぎわ}から寝^ねるようなやつだ。言われてみればそのときの授業内容は三割も頭に入っていないかった。

「ふん」

そつけない態度を取りながらも丁寧^{ていねい}に書き込まれたノートを机の上に出してくれる愛沙になにか懐^{なつ}かしいものを感じて思わずまじまじと見つめてしまった。

「な……なによ」

「あ、ああ、ごめん。ありがとな」

素直にお礼を言う。いつもみたいに冷たくあしらわれるかと思つたが、か細い声が返ってきた。

「そ、そう。役に立てるなら……良かったわ」

顔を赤らめて目を背ける愛沙になぜかドキツとしてしまう。いつもとギャップがありすぎて動揺^{どうごう}しているんだと自分に言い聞かせるが、久しぶりに見た幼馴染^{おとななじみ}の柔^{やわ}らかい表情は思いのほか魅力的^{みりょく}に映つた。

愛沙ってこんな、可愛かつたんだな……。

愛沙のノートは可愛らしく読みやすい字で、とても丁寧にまとめられていた。

真面目な性格が反映されており、各授業の後に必ず授業内容を振り返り、まとめ直している。これのおかげで休んだ部分も板書内容だけでなく中身もしっかり頭に入ってきた。

「すごい……。めちゃくちゃわかりやすい……」

「ふふーん。なんてったって私のお姉ちゃんだからねー」

なぜかまなみが偉そうにするが、たしかにこれが身内なら誇らしくなるのもわからなくはない。自慢の姉というやつだろう。

「しかしそうか……毎回ここまでやるから高西はあの成績なのか」

成績上位三十名は張り出されるが、愛沙はその中でもさらに上位の常連だ。さすがとしか言いようがない。

と、そこで愛沙の様子がおかしいことに気づく。褒めたつもりだったのに機嫌が悪い。

「えっと……気に障ったなら申し訳ない？」

もしかしたら俺ごときに成績を語られるのも腹立たしかったのかもしれない。と思ったら、愛沙の怒りの原因は想定外のところにあった。

「名前」

「え？」

名前……？

「なんで私だけ苗字なの」

「あ、ああ……」

クラスでの距離を考えれば、普段から口に出すときはこうしておく必要があるので癖になっていた。

「えっと……ごめん？」

「ごめんじゃない。名前」

圧を感じる。

「あー……」

愛沙が言いたいことはわかる。が、こう改まられるとなんか緊張する。

ただまあ、やらないと愛沙の周りだけ冷房いらずの冷たい空気がさらに冷え込んでいっている、ためらいがちに声に出す。

「……愛沙」

ふわっと愛沙が笑った。

「うん。よろしい」

名前を呼んだのも、そんな柔らかな表情で笑いかけてきたのも、久しぶりすぎてなんだかよくわからない気分になる。

それはどうも愛沙も同じだったらしく、さっと顔をそらして机に向き直った。

ただ長い髪をかきあげたときに見えた耳が真っ赤になっているのだけは、はっきり見えてしまった。

「ふふーん。康貴にい、お姉ちゃんは可愛いでしょ」

ここで余計なことを言うともたまた機嫌を損ねかねないので、とりあえず愛沙には見えないうように黙って頷いておく。

「さてさて、可愛いお姉ちゃんを堪能したから、次は私の番です！」

そう言って教科書をほっぽりだしてこちらへ飛びついてくるまなみ。俺が膝枕するような体勢になった。

「疲れたのか？」

ナチュラルに飛びついてきたので頭を撫でてやろうとしたが、愛沙がいることを思い出して慌てて手を引つめた。

基本的にまなみから来る分にはギリギリでセーフだが、俺が何かするのは認めないとい

うのがここまで愛沙を観察して得た教訓だった。まなみはちよつと不服そうだ。

ただ、恐る恐る様子を窺った愛沙の態度は、いつもと違っていた。

「休憩にしようか」

穏やかな表情の愛沙はそう言って立ち上がり、部屋を出て下に降りていった。

あれ？ 思ってたのと違う。

戸惑う俺を見ながら、まなみは膝の上で楽しそうにニヤニヤしていた。



愛沙が部屋を出てすぐ、まなみと目を合わせる。

「なあまなみ」

「んー？ お姉ちゃんが機嫌がいい理由？」

俺の膝の上で仰向けになり、お見通しと言わんばかりの表情でこちらを見上げてくる。

「心当たりはあるんじゃないのー？」

心当たりというか、変化のきっかけなど名前を呼んだあれしかない。

「ずっと寂しかったんだよ。お姉ちゃんも」

「そんなことは……」

ないだろ？ あの愛沙だぞ……？

「わかってるんでしょ？ 康貴にいま」

じつと見上げてくるまなみの表情は、いつものあどけなさ^ぬが抜けて、どこか儂い^{はかな}ほど真剣^{まけん}だった。

「お姉ちゃんのこと、家族以外では康貴にいが一番見てきたんだから」

「そうか……？」

そう言われれば、そう……なのかもしれない。

ただ……いや、今となつてはもう遠い存在としか思っていなかった。もしかしたら愛沙もあまり変わっていないところがあったのかもしれない。

そういうことなのだろうか？

考え込もうとしたところでまなみが膝から飛び起きてきた。

「さて！ お姉ちゃんがいないうちにやりたいことがあるんだった！」

さつきまでの神妙^{しんまう}な表情はどこへいったのか。一瞬^{いつしゅん}でいつもの明るい表情に戻^{もど}ったまなみが声をかけてくる。

「何するんだ？」

「ん。康貴にいと約束！」

「約束？」

なぜか正座をして、目をキラキラさせながらこちらをまつすぐ見据^{みす}えるまなみ。

元の可愛さとさつきまでのギャップですこしドキッとさせられる。

「次のテストでね、私が頑張^{がんば}ったらご褒美^{ほうび}がほしいんです」

「いいぞ」

「軽いつ！ まだ内容も言っていないのに！」

結果はともかく頑張りが一番近くで見ているわけだ。元々そのつもりだった。

ケーキとか買ってきてやれば喜ぶだろうなと思っていた。

「じゃあ！ 私が三十番以内に入ったら康にいは私の言うことを何でも聞いてください！」

「三十番かあ……」

もうちょっと現実的な数字の方が、ショックを受けないで済むような気はする。

「ちよつと！ やる前からその顔はやめて！」

「ごめんごめん。でもいいのか？ その順位で」

「むしろ康にいは、何でも言うこと聞^きくつてところにツッコまないでいいの？」

それはまあ、どうせまなみはケーキとかでいいはずだから。

「なんか失礼なこと考えてる気がする」

「ま、約束はするよ」

「ほんとっ？ よしっ、よしっ！」

なぜか俺に背を向けてから小さくガツポーズをしている。隠れてやったつもりだとしたら丸見えすぎて微笑ましかった。

「じゃあ、約束！」

「懐かしいな、これ」

改めてこちらを向いて正座したまなみが小指をこちらへ向ける。

差し出された小さな小指に、ふた回りほど大きい自分の小指を絡める。お互い成長してるんだな。やっぱり。

「ゆーびきーりげーんまーんうーそつーいたーら康にいの恥ずかしい秘密を学校中にばらまく」

「待った」

「指切った！」

リズム無視のめちゃくちゃな約束に抗議するが問答無用で指を切られてしまった。

「じゃ、結果を楽しみにしてて！」

そう言っつまなみは定位置に戻っていく。

タイミングを見図らったかのようにお菓子とお茶を持った愛沙が部屋に來たので、勉強会は一旦休憩ということになった。

満面の笑みのまなみと、柔らかく微笑む愛沙。改めて見ると、場違いな気がして緊張するほど、二人とも可愛く、綺麗に成長していた。

暁人の言葉を思い出す。

『高西姉妹の家に合法的に通えるなんてお前、その辺の男連中からしたら宝くじが当たるより嬉しいぞ』

その男たちの気持ちが少し、理解できた気がした。

世話の焼けるお姉ちゃん【まなみ視点】

「ふふ……ふふふ……」

「お姉ちゃん、怖い……」

康貴にいが帰った後の高西家。私とお姉ちゃんはそれぞれ今日の余韻に浸っていた。

お姉ちゃんの方はちよつとなんか、危ない感じもするけど……。

「だって……名前呼んでくれたの、何年ぶりかな……」

「よかったねえ。ほんと」

そしてその目をうるませて顔を赤く染めながらクッションに沈む。ほんとにそれ見せたら康貴にいい、すぐお姉ちゃんのものになると思うんだけどなあ。

ま、そんなすぐにはムリだよな。

「ありがとね。今日」

直球の感謝に思わず目を見開いてお姉ちゃんの方を見てしまった。

恥ずかしくなったのか「なによ」と言って顔を背けてしまったけど。

ほんとに嬉しかったんだね。お姉ちゃん。



「でもね、お姉ちゃん。それで満足してたらだめだよ」

お姉ちゃんはほっといたらこれで満足しきってしばらくまた何もしいはずだ。こうして久しぶりに康貴にいと接してれば昔と変わってないことがよくわかる。昔と変わっていないということは、お姉ちゃんと私を惚れさせるくらいに、魅力的で優しいことになる。

それはつまり、他の人に取られちゃう可能性があるってこと。お姉ちゃんにないけど、他の人と康貴にいが付き合ってるのは見たくなかった。

「でも……まなみには言ってなかったけど、私康貴には多分嫌われて……」
 なんで二人して同じようなことを言ってるんだろう……。

「いいの？ 康貴にいい、取られても」

「取られる……？」

「知ってる？ 一年生の中では康貴にいい、結構人気なんだよ？」

「えっ!!」

うつむいていたお姉ちゃんが掴みかからんばかりの勢いで飛んできた。

「ほら、康貴にいい面倒見がいいから」

「でも、あいつが下級生と話す機会なんて……あ……」

「康貴にいい、応援団だからねえ」

「あ……そっか……そうよね。あいつ歳下にはすごく優しいから……」

なぜかお姉ちゃんから責められるような視線を受けるけど、気にしたら負けだ。

うちの学校はクラスごとの縦割りで体育祭のチームを分けてる。応援団とは名ばかりで実際には体育祭の実行委員会として雑務を押し付けられて、集まる機会も多いのだ。

「でも康貴にいい、あんなのよく入ったよねえ」

「あれね……うちのクラスは運動部が多いから」

「あ……」

集まる機会が多いせいで、部活に集中させたい強い運動部は応援団に入るのを禁止しているところが多い。結果的に運動部が活躍する体育祭の実質の実行委員会は、非運動部、なんなら康貴にいいような帰宅部が多く入ることになっているというわけだ。

ま、今はそんなことでもいいか。とにかく今はお姉ちゃんをちょっと焦らせることだ。

「あのね、私テスト終わったら康貴にいいデートしてもらおうの」

「ふーん。そう。テストが終わったらデート……え？ デート？」

「デート」

「デート……？」

あ、思ったより効いてる。待って？ 効きすぎて目が怖い。

「私がテストで三十番以内に入ったら、何でも言うことを聞いてもらうって約束したんだよ」

「なにそれずるい……」

「で、デートをしたらうの」

「でもそれ、どうやって三十番以内に入るの……？」

「うっ……」

二人して本当に信用がない。

私だってやればできるのに……。二人とも見てろよ！

「まあまあそれはともかくさ！ お姉ちゃんもやってみたらどうかな？」

「やってみる……？」

「三十番以内に入ったらデート作戦」

「三十番以内に入らないほうが難しい状況で……？」

こいつ……。

「じゃあ例えば、康貴にいと勝負するとか」

「勝負？」

「そう。成績で。お姉ちゃんならハンデつけてでもなんとかするでしょ？」

康貴にいても家庭教師を頼まれるくらいの成績はずっとキープしてみたいんだけど、お姉ちゃんと比べちゃうと、ね……。

これは全然康貴にいが悪いわけじゃない。お姉ちゃんの成績が良すぎるだけだ。

「明日学校で言ってみたら？」

「学校で……？ でも私、あいつに避けられてるから……」

多分そうじゃないから大丈夫だよ、お姉ちゃん。

「じゃ、私だけテストが終わったらデートしてよいかかな」

「む……」

「ふふ……」

頑張れ！ お姉ちゃん！

その後下を向いて考え込み始めたお姉ちゃんに小さくエールを送って、私はそっと部屋を出た。

「お姉ちゃんに塩を送るのはこれで最後にしたいなあ……」

まあでも、しばらくはこれも、楽しいかもしれないと思って勉強モードに頭を切り替

えた。

なんとしても三十番以内に入るんだ！ 家庭教師の康貴にだって喜んでくれるはず！

「頑張るぞー！」

幼馴染と妹

「ちよっと！」

「え……？」

高西愛沙はとにかく目立つ。

一番の理由は人の目を引く容姿だ。別に髪色が派手とか、服装がおかしいとかそういうことじゃなくて、なんというか、オーラが違う。

で、その目立つ愛沙がこんな村人Aである俺に話しかけると当然周りがざわめき立つ。だがそんなことお構いなしに愛沙は続ける。

「まなみとの話を聞いたわ」

「ああ……」

どのことだろう？

まあいい。なんか怖いし早く終わってほしいから、いちいち確認したくない。

「私とも何かするべきじゃない……？」

「高西とも……？」

何の話だろうか。あ、まずい。なんかわからんけど機嫌を損ねた。目つきが三段階くらい険しくなった。怖すぎる。

「高西……？」

「えーと……」

「私の名前は？」

怒ったのそこなのか？

「私の名前は……？」

机に手をかけてこちらに身を乗り出してくる愛沙。

怖いです。言います。

「愛沙……」

「よろしい。で、まなみにはご褒美をあげるようだけど、同じ条件だと康貴が可哀想よね」
ああ！ まなみのつてそのことだったのか！

だとしたら同じ条件って……愛沙がめちゃくちや体調を崩したりしない限り俺は言うことを聞く羽目になる。理不尽だ。なにさせるつもりだ！

「そんな顔しないでも、同じ条件でなにかするわけじゃないわ。勝負をするの」

「勝負……？」

「そう。私の一番点数の低かった教科と、康貴の一番点数が高かった教科で良いわ」

「それは……」

いくらなんでも舐めすぎだと言いたいが、実際にはそんなこと言えない絶妙なラインだった。

愛沙の成績はすべての教科で九〇点前後だから。

対して俺は良い教科がギリギリ九〇に届くかどうか。この勝負のためにある程度力を入れる教科を絞るにしたって、極端に一教科に集中して他の教科の成績を落とすというわけにもいかないことを考えれば、本当に絶妙だ。

「勝った方の賞品は、まなみと同じで。わかった？」

「お、おう……」

思わず頷いてしまったのは、またこちらに身を乗り出して目の前まで顔を寄せられたせいだ。免疫がないんだから勘弁してくれ。普通の女の子相手でもダメな距離に、愛沙みたいな美人が来たら誰だって何も言えなくなるだろう……。

「よろしい」

有無を言わせない勢いそのまま、愛沙はさっと身を翻して自分の席に戻っていった。
あ、いい匂いがする。いやそんなこと言ってる場合じゃない。

「随分目立ったな、自称村人」

ニヤニヤしながら暁人が話しかけてくる。

「うるせえ」

「なんだかんだ言ってもやっぱ、可愛いもんなあ、アイドル様は」

自分でも顔が少し火照っているのを感じる。

愛沙が可愛いことは否定はできない。ちよっとドキドキしたのも事実だった。

「で、何だったんだ？ 今の」

「あー……何だったんだろうな？」

予想できる展開としてはまなみが何か言って意地になった愛沙が絡んできたというパターン。これは昔からちよちよこあるパターンだった。

そうなった愛沙は普段の冷静さを忘れてムキになるところがある。今回みたいに。

「ま、これまではなぜかアイドルに目をつけられてただけのお前が、直接接点を持ったわけだ」

周りの印象はそういうことになるだろう。

「俺としては別に、違和感のない組み合わせなんだけどな」

「バカ言うな。俺とあいつで釣り合うか」

「その言い方だとあれだな。お前は受け入れ態勢ばっちりってわけか」

失言の揚げ足を取られてしまったと思うがもう遅い。

顔が赤いことは、暁人にすでに見抜かれていたから。

「まあいいじゃねえか。これを機にちよつとは話せよ」

「それはまあ、良いんだけどな」

ただなあ。可愛いのは確かだし、昔からの付き合いもある。

それでも、今の様子は正直、物理的に怖い。睨みを利かせる愛沙の眼力は年々上がっているし、最近はより一層厳しくなっている。

今回の件、条件は要するに、勝ったほうが負けたほうに何でも言うことを聞かせるというものだ。勢いそのままに頷かされたが、あの相当のハンデがあつてなお、勝算は五〇％もない。

何かしら従わせたいことがあつて挑んできたのだとすれば、警戒しておいたほうがいい。

「例えばだけど、まなみの家庭教師から引きずり下ろすつてこともありうるな……」

「それはお前……ネガティブが過ぎるだろ……」

自分でもそう思うがここ数年の愛沙との付き合いだけを考えるとまあ、ありえない話ではないなと思ってしまう。

そして何より、ポジティブに考えるのはその予想が外れたときのショックが怖い。特に自分の気持ちが少しずつ意識されてきている今、それを考えるのは少し、色んな意味で怖かった。



授業を挟んでなお、「なんなんだあいつ……う」「なんで高西さんが……？」という声と視線が突き刺さる。

「はあ……」

「なんだなんだあ？ 男子みんなの憧れに声かけられてため息とは結構なご身分だな？」ニヤニヤと暁人が顔を近づけてくるので八つ当たり気味に頭を小突いておく。

あの後すぐに授業に入ったのはいいものの、消化不良気味のクラスメイトたちは授業が終わった途端さわつき始めた。中にはこちらを射殺すかと思わんばかりの視線すらある。

「くそ……あいつもうちよつと自分の影響力を考えろ……」

「そりゃあお前、これまで話してなかったツケだろ。家まで行っておいて釘刺してないんだから」

まあ確かに、そう言われればまあ俺にも非が……いや納得できねえ。

「ま、後は帰るだけだろ」

「だから気が重いんだよ……」

休み時間と違って終わりが無いんだ。いつまでもこれが続くのかと思うと気が重い。

「向こうはいつもおどおりつてのもまた、ほんとに差を感じるよなあ？」

暁人のニヤニヤが止まらない。こいつは人の不幸がそんなに楽しいのか……。

「まあでもさすがにあの辺は、情報のキャッチアップがはやいな」

「それがまあ、数少ない救いだな」

愛沙の周りに集まるのはクラスの中心人物たち。吹奏楽の部長だったり、サッカー部のエースだったり、生徒会副会長で次期会長候補だったり。

愛沙の家に行っていることも、その理由も、本人からでなくとも情報収集はできる人間たちだ。

だからまあ、あの辺は特段いつもと変わりなく過ごしている。あのあたりから敵意をむき出しにされると、学校生活に影響を及ぼしかねないのでその点は非常に助かっていた。

「ま、良い思いした分少しくらいは苦しんで——」

「康貴にいいいいいいいいいい！」

暁人の楽しそうな声は思わぬ乱入者の声でかき消された。

いい気味だと思っひま暇もない。最悪のタイミひまングで最悪の来客だった。
「まなみ!？」

窓側の俺よりも扉とびらに近いのもあつて俺より早く愛沙が反応した。

「あ、お姉ちゃん! もうホームルーム終わった?」

「まだよ。ちょっと外で待つてなさい」

「はい。康貴にいい! また後でね!」

ブンブンと俺に手を振つて扉かどから離れるまなみ。

扉と俺を交互こうごに見るクラスメイト。

視線とざわめきが先程までの比ではないほど膨はくれ上がったところで、担任がやってきて

ホームルームとなった。

「最悪だ……」

うなだれる俺を、やはり楽しそうな暁人が笑いながら肩かたを叩たたいていた。



「勘弁してくれ……」

今から明日の学校のことを思うと気が重い。いや明日は休みか。良かった。いや良くな

いか。ダメージを負う時間が長引いただけな気もする。

いずれにしても気が重いことには変わりがなかった。

「あははー。康貴にいい、元氣だして?」

「お前のせいだからな!」

「わー!」

髪かみの毛を強めにグリグリとやってやったが、まなみの方はそれでも楽しそうに笑うだけだ。

あのと逃にげるように学校を離れ、ようやく落ち着ける場所まで出てきたところだった。

「まなみ。こういうのはもうやめなさい」

「えー……」

なし崩し的に一緒いっしょに帰ることになった愛沙からも注意が飛ぶ。

「康貴も困こまってるじゃない」

「困こまってるのー? 康貴にいい?」

二人揃そろって困こまらされたのでコメントがしづらい……。

黙だまっているときまなみはニヤリと笑つてくつついてきて、愛沙の視線が鋭すどく歪ゆがんだ。

双方さうほう良い方と悪い方に勘違かんちがいしている。

「康貴にいは優しいから大丈夫だよねー?」

「そう……。まなみと楽しく帰ってくればいいわね」

「おいおい……」

一気に不機嫌になった愛沙をどうしようかと悩んでいたら俺にくっついていたまなみが飛びつくように愛沙に抱きつきにいった。

「おねーちゃん!」

「きゃっ」

可愛らしい叫び声。

「ひゃっ!」

そしてまた可愛らしい声が漏れる。これはくっつきにいったまなみがそのまま耳元でなか囁いたせいだ。よく聞こえないが愛沙の表情が徐々に柔らかくなってるのを見ると、なんかしらフォローを入れてくれてるらしい。

ただいちいち「んっ」とか「ひゃっ……ちよつと近すぎるわよ」とか聞こえてくるのはやめてほしい。妙な気持ちになる。

しばらく小声でなにか囁き合って、ため息をつきながら愛沙が隣に並んだ。

「はあ……仕方ないわね……」

「えへへ。私はお姉ちゃんも康貴にいい大好きだから!一緒に帰れたかったの!」

「はいはい……」

仕方なさそうに笑ってまなみの頭を撫でる愛沙。やっぱり睨んでなければ、ほんとに可愛いな……。

「なに?」

と、見ていたのがバレていつもの顔に戻ってしまう。

「康貴にいはお姉ちゃんに見惚れてたんだよ」

「なっ!!」

まなみの言葉に俺より愛沙のほうが顔を赤くする。

まなみがいるとお互い振り回されっぱなしである。

「でしょ! 康にい?」

「あ……」

返事をしないのはまずい方向に転ぶというのを先程学んだばかり。

そして何より、愛沙のこちらをちらちらと不安げに窺う様子が可愛くて、思わず顔を見てしまった。

「えへへー。そうだよね! お姉ちゃんは可愛いもんね!」

上機嫌なまなみと、顔の赤い二人が影を伸ばしながら、そこからは特に誰かなにか言うでもなく、家まで歩いていく。

久しぶりに三人で歩く道は、いつもの道なのに懐かしく感じられた。

テストが明けて

なんだかんだで時は過ぎてテスト期間も終わった。

学校に名を轟かせる高西姉妹に絡まれた次の週。覚悟を決めて登校した月曜日の朝は、拍子抜けするほどいつも通りだった。

俺みたいなモブがああ二人といざ並んだのを見たら、変な勘ぐりは起こらないくらいに差があることにみんなが気づいたとかだろとか。

それともテスト前でそれどころじゃなかったとか……。
という話を晝人にしたら、呆れながらこう答えられた。

「いや、お前……。高西が騒動緩和にだいぶ奔走してくれてたぞ」

「え？ そうなのか？」

「お前ほんと……そんなんだからあの態度なんじゃないのか？」

「う……」

否定できない。

そのあたり、愛沙は案外気を回す部分はある……。いや案外ではないな、現に俺以外に

は常にそれだから、あれだけ人が集まるんだろう。

あの帰り道のときも、まなみをたしなめたのは俺をかばうためだったしな……。

「ちゃんと家庭教師の話を広めてくれる。ご丁寧に親同士が仲が良かったって付け加えてな」

「そうだったんだな……」

「アイドルが言うことだし、アイドルや勝利の女神にも悪い虫がついてるわけじゃないって話ならいいだろうと、みんなそれに乗っかって今に至るってわけだ」

今度家庭教師で行くとき愛沙に手土産くらいは渡そうと思った。

おそらく「あんたのためにしたんじゃない」くらいのことは言われそうだが。いやむしろ俺のためでなく変な噂が立つのは愛沙にとっても良くないという理由が大きいと思うが。

それでもまあ、助かったことには変わりはないからお礼はしよう。

「にしても、実際のところどうなんだ？」

「なにが？」

「なにが？　じゃねえだろ。高西姉妹との仲とか、どつちを狙うのかとかだよ」

「どつちもないから安心しろ」

「じゃあ俺が手を出しても良いんだな？」

そう言われて少し考えた。暁人はモテる。愛沙たちのようなクラスを中心とは少し外れた独自路線を生きてるが、それがマイナスになることもない。

釣り合いとしても悪くないのではないだろうか？

「なんかお前、アホなこと考えてるな？」

「いや、いたって真面目に考えてるぞ」

「ダメだな、こりゃ」

そう言って暁人は自分の席にいつも通り突っ伏していった。

まあ後半の話はともかく、もうすこし愛沙のことを考える時間は増やさないといけないと考ええるようになった。

「おい暁人」

「あ？」

「次は起きといたほうがいいだろ」

「んー？　ああ、テストか」

正確にはテスト返し。

うちは名前順ではなく教師が好きな順に呼ぶ。暁人はどの教師でも早めに呼ばれていた。

ちなみにこいつはこんな態度でもそれなりの点数を取る。基本的になんでもそつなくこなすタイプだった。

「あーそーいや」

「ん？」

暁人がなにか思い出したようにこちらを向く。

「今回のテスト、俺らも勝負しないか？」

「なんでまた……」

「ちょっと付き合ってほしいことがあってな。いいだろ？ お前今回高西との勝負でいつもより自信あるんじゃないのか？」

「それは……まあそうか。条件は？」

「五教科総合点。負けたほうが一個要求を呑む」

「無茶な要求じゃなければいいぞ」

「よしきた」

元々の成績で暁人と俺はそこまで大きく開きがなかった。今回の自信を考えればまあ、悪い話ではない。

それに何より、付き合ってほしいところくらいはいつでも付き合う間柄だ。勝ったら

なんか奢^{ちぎ}らせればいいし、負けてもそこまで、損はない。

そんなことよりまなみの結果と愛沙との勝負がかりでしょうがなかった。



一通りのテストが返ってきて、いよいよ運命のときとなった。

今日は勉強会以来の久しぶりの高西家。テストで一区切りついたのもあって、お疲れ様会と称^{しょう}してご飯までお世話になることになっている。

「とりあえず、まなみの結果だな」

成績上位者の張り出しは今日だったはずだ。フロアが違^{ちが}うので見に行きはしなかったが、まなみに直接確認しよう。

「おじやましーす」

「はーい！ ああ康貴^{こうき}くんよねー？ そのまま部屋に行ってあげてー」

インターフォンを押して確認を待たずにドアを開け、それを確認することもなく部屋に通される。セキュリティレベルが致命的に低い気はするがもう慣れたものだった。

勝手知ったる他人の家。返事をしていつもどおり階段を上がると、そこにはいつもと違う光景が広がっていた。

「あ……」

「へ……？」

構造上階段を上って最初に見えるのは愛沙の部屋になる。普段は扉を閉めているので壁と同じなわけだが、今日に限って扉が開いていた。

そして悪いことというのは重なるもので、愛用のイヤホンを装着していたせいで、俺が家に来たことに気が付かなかった、ということらしい。

「あんた……今日来る予定だったのね……」

「そう、なんだよ……」

緊張が走る。

問題は愛沙の服装。

扉の向こうの愛沙は、どう見ても下着姿だった。ピンクのリボンがあしらわれた可愛いフリルのパンツと、胸元を含めて何もかもゆるゆるの肌着のシャツ。

よく見るとそのシャツの中にブラジャーをつけてる様子もな——。

「で、いつまで見てるの？」

「あ、えつと……ごめん！」

なぜか俺が慌ててドアを閉める。普通逆じゃないのか……？



しかし怒^{おこ}ってた、よな……？

これこの後の晩飯……めちゃくちゃ怖^{こわ}いな……。

「気が重い……」

まあそれでも進まないわけにいけないので、すぐ隣のまなみの部屋に向かった。こちら
は愛沙と逆で、いつもは開け放たれている扉が閉まっていた。

同じ轍^{くろ}を踏まぬようノックをしてみるが、返事がない。

「まなみ？」

「康貴……にいい？」

様子がおかしい。

「入るぞ？」

「……ん」

生気のない声を聞き、返事が聞こえるや否^{いな}や部屋に飛び込むように入る。

そこにはクッションを抱^だきしめて目を腫^はらすまなみの姿があった。

「えへへ……見られちゃった」

「何してんだ……」

「ぐすっ……康貴にいい……ごめんね？」

「なにがだ」

「あのね……頑張^{がんば}ったんだけど……ダメだった……ぐす……みたい」

なんとかそれだけを言い切ると、クッションに顔をうずめて肩^{かた}を揺^ゆらした。



「落ち着いたか？」

「ん……えへへ……」

まなみを慰^{なぐさ}めるため「こっちに來て」と言われたり「ちょっと撫^なでて」と言われるたび
言うことを聞き続けていたら、すっぱりあぐらをかいた俺の足の間におさまって丸くなっ
てしまっていた。

「ごめんねえ……康にいい……」

「別に謝^{くや}ることはないけど……悔^{くや}しかったんだな」

「うん……」

頭に手を置くとそのまままた抱^{かか}えたクッションに顔をうずめる。

「頑張^{がんば}ってたのはちゃんと知ってるから、安心しろ」

「でも……」

「そもそも俺としては無茶振りが飛んでこない分良かったと思うぞ?」

「あはは……」

目標がおかしいくらい高く設定されていたんだ。赤点すれすれをさまよっていた人間がいきなり成績上位者の発表に載るのは普通に考えれば無謀だ。

「で、何位だった?」

「五十四番……」

「すごいな。よく頑張ったじゃんか」

素直に褒める。

もともと赤点すれすれをさまよっていたまなみからすれば大躍進。百人抜き以上の偉業だ。本当によく頑張ったな……。

「でも、約束……」

「別に俺が三十位以内に入れて言っただけじゃないだろ?」

自分が言いだした目標への進捗としても、五十四位まで頑張ったなら十分過ぎるほどだ。

「ま、どっちにしても頑張った分のご褒美はあげるつもりだったしな」

「だめだよ……それは」

珍しく意固地なまなみ。元々負けず嫌いな性格は愛沙そっくりなので、自分で納得でき

ない部分があるんだろう。

「何でも言うこと聞いてあげるのは無理だったけど、何かしらは勝手にするから」

「勝手に?」

「そう。俺がご褒美をあげたいから、勝手に」

「そっか……勝手になら、仕方ないのかな……」

「仕方ない。まなみは十分頑張ったからな」

「そっか……そっか……」

その後また少しだけクッションに顔をうずめていたが、復活したときにはいつもの天真爛漫なまなみに戻っていた。少し無理して笑う様子はあったが、次のテストに向けて気合を入れるまなみを見ていると次は目標を達成することは間違いないだろう。

鼻屑目もあるかもしれないが、確信を持ってそう思えた。



「康貴。テストの結果は?」

「あ、ああ……」

まなみの勉強が終わりお疲れ様会のためにリビングへ向かうと、すでにテーブルについ

ていた愛沙に声をかけられた。

どうもさっきのことはなかったことにするつもりのようなのだ。こちらもありがたくそれに乗らせてもらうことにした。

「私の最低点は八十八。康貴は？」

「相変わらず凄いな……負けました」

「ふふ。で、何点が最高だったの？」

「八十五だよ」

愛沙との勝負だけを意識するなら、一教科にかけて勉強すればもう少しいけたかもしれない。ただ他の成績を捨ててまで愛沙との勝負にかける度胸は俺にはなかった。

いやそれでも「瞬考えたけどな。何でも言うことを聞くといい条件が怖すぎて……」

「さて、何してもらおうかなー」

「う……」

楽しそうに笑う愛沙は可愛いんだが、今回に限ってはその笑顔も怖い。

「ま、それはおいおい考えるわね」

「わかったよ……」

「ふふ」

◇

終始楽しそうに笑う愛沙はさっきのことなどまるで頭にないかのようだった。それはそれで安心したが、ここまで何も言っていないとなるとそれも含めて怖くなってくる……。墓穴を掘りたくはないのでこちらから話題を出すわけにもいかず、そうこうしているうちに食事の準備が整っていった。

「で、まなみは何してもらうことにするの？」

食事が始まってしばらくしたところで、愛沙がこう切り出した。

「あー……実は……」

「ダメでした！」

言いつらいかと思つて口を挟んだ俺を遮って、明るくまなみが答えた。

「え……？」

「えへへ……ちよっと甘かったみたいで……」

たははーと笑うまなみからは、さっきの様子を知っていても気にした様子は窺えないくらいだった。

ただそこはさすが姉妹と言うべきか。愛沙にはしっかり伝わったようで驚いた顔をした

後少し悲しそうな顔をして下を向いた。

「そう……」

「ま、また頑張るよ!」

「そうね。でも今回も頑張ったのは間違いないから、康貴、まなみと一緒に出かけさせて」

「えっ?」

突然の振りに戸惑う。

「私が勝った分、それでいいわ」

「えっ! ダメだよお姉ちゃん!」

「元々康貴に頼みたいことなんてそんなないし、丁度いいわ」

「もうっ! だめ。自分のことで使ってください!」

どうしたものかと思うが、もしまなみが出かけることで気分転換になるなら連れて行くのは別に全く問題はない。

「出かけるくらいならわざわざ勝った条件持ち出さなくてもいつでも行くぞ?」

「ええ?」

あれ? なんて二人とも驚いてんだ?

「康貴にはそんな! 誰とでもデートに出かけるような人だったの!」

「いや待てなんでそうなった」

そもそもどっからデートという単語が出てきた!? お前らと俺の関係値で一緒に出かけるのはそう呼ばないだろ。

「そう。康貴は誰とでもいつでも出かける……と」

「愛沙はなんでちよつと機嫌悪そうなんだ……。二人に言われればそんなもん、いくらでも付き合うって話だ」

「そ、そう……そうなのね……」

よかった。今回は正解だったようで一気に表情が柔らかくなった。

「じゃ、じゃあ康にい、私がお願いしたら行ってくれるの?」

「もちろん」

「ほんと?」

「なんで疑うんだ」

むしろ今まで何回一緒に出かけたかと思っているんだ。今更何をという話である。

「じゃああとどこ行くか決めよう!」

まなみは今にも踊りだしそうなくらい元気になってくれた。よかった。

「康貴……私は？」

「なんだ。愛沙もどっか行きたいところでもあるのか？」

「そうね……丁度いいから、勝った分は荷物持ちでもお願いしようかな」

「ああ、わかった」

それで済むならむしろこちらとしてはめちゃくちゃ助かる。なんなら日頃のお礼とさっきのお詫びを考えて、一つくらい買物に貢献してもいいくらいだ。

「ふふ……うちの娘たち、世話が焼けるけどよろしくね。康貴くん？」

「このくらい別に、なんでもないですよ」

「あらあら」

おばさんも楽しそうに二人の様子を眺めていた。

まなみの作戦【愛沙視点】

「良かったわね」

康貴が帰ってから、まなみは終始嬉しそうにしていた。

「えへへ……うん。でも、ほんとに良いのかなあ」

まなみはきつと本当に悔しかったはずだ。たくさん頑張ったのを見てきた私としては、この子がこのまま報われないのは見ていられなかった。

多分だけど、それは康貴も同じだったんだと思う。

「頑張った分は報われるべきよ」

「でもね、康貴に、私が泣いてたの見てすごい励ましてくれて……それだけでも十分たくさんしてもらっちゃったのに……」

「たくさん……？」

康貴、家庭教師の時間を使って何をしているのかしら……？

「うん。いつもみたいに頭もボンボンしてくれたし、今日はぎゅってしてくれて」

「ぎゅっ？」

「ん……後ろから、ぎゅって」

「後ろからぎゅっ!?」

そんなの……。羨ましすぎる……。

まなみも恍惚とした表情で余韻に浸ってる。ずるい……。

「だからいいのかなって……」

「そうね……ちよつと康貴は甘いかもしれないけど、今回はいいでしょ。そのくらいまなみは頑張ったわ」

「えへへ。お姉ちゃんに褒めてもらえたー!」

多少嫉妬はしてしまうが、今回は仕方ないと思う。

羨ましいけど。

羨ましいけどっ!

「で、お姉ちゃんは荷物持ち頼んでたけど、どこに行くの?」

「そうね……適当にぶらぶらしようかなって」

「適当に……大丈夫?」

大丈夫? 何を言ってるのかしら。

「あの……お姉ちゃん。今日はだいぶ喋れたとは思うけど、二人きりになったらまた緊

張して冷たくなっちゃったり、しない?」

「う……」

否定しきれない。そうだ。荷物持ち……言葉を濁したけどこれは間違はなくデート……。あれ? そう考えると今から緊張してきた。

「今からそれじゃきつと、ろくに何もできずに帰ってくることになっちゃうよ……」

まなみが若干呆れながら言うが、その予想はおそらく正しい。

でもせっかく出掛けるなら楽しくしたい。どうすれば……。

「目的を決めてさ。しかも次も一緒に遊びに行けたりしたら、どう?」

「それは……いいわね。もちろん」

「ふふ。じゃあ私に一つ、作戦があります!」

「作戦?」

まなみの作戦は頼りになる。今回の勝負だつてまなみのアイデアだ。しっかり聞こう。

そもそもやっぱり、康貴と二人になってちゃんと喋れる自信はない。

でもせっかくのデートだ。嫌な思ひ出にはしたくない……。そうになったらもう、康貴とはそれっきりってことも……ありうるかもしれない。

「お姉ちゃん? 大丈夫?」

「ええ……」

まなみの作戦……。しっかり聞かなくちゃ。

「お姉ちゃん多分、水着のサイズ合わなくなってるでしょ？」

「へ？」

「あれ？ 私が見てる限り去年のは入らないよね？」

「そうね……」

なんでバレてるの。

「そりゃだって……毎日見るから……おっぱい大きくなってるもんね」
面と向かって言われると恥はずかしい。

一方まなみは「私も同じ血が流れてるはずなのに……」と自分で自分の胸を揉もみ始めた。
「それ、間違っても康貴の前でしちゃダメよ」

「わかってるよー！」

そう言いながらも続けるまなみ。こういうことに關して言えば、まなみは全く信用できない。まあ、康貴の前でやってもあっちもあっちでどう思うのかわからないけど……。さつきも私の着替きえを見て特に反応を示さなかったし……。

「お姉ちゃん？ 大丈夫ー？」

「はっ。ええ……大丈夫よ」

意識を戻もす。今はまなみの話に集中しなきゃ。

「で？ 水着がどうかしたの？」

「康貴にいと出掛けるとき、買っておいでよ」

「え……？」

水着を？

「水着。せっかくなら選んでもらって、試着までしてあげたら康貴にもドキドキすると間違いないし！」

「ドキドキ……？ してくれるのかな……あいつが」

着替え見ても無反応だったのに……？

「大丈夫！ 絶対する！」

「そう……」

想像しただけで胸が高鳴る。康貴が私を見てドキドキする……？

もしそれが本当なら、かんべきな作戦だ！ さすがまなみ！ 私の妹だけあるわ。

「水着を買いに行くってなったらさ、多分康貴には聞いてくるの。誰かと一緒に行くのか？ って」

「確かに……」

その光景が浮かぶ。浮かんで想像して、今からドキドキしてきちゃう……。

「そこでお姉ちゃんがこう言うの。予定はないけど、誘われたら行くわね」

「そのくらいなら私もできるわね……」

まなみが真似た私はそっくりすぎてすんなりイメージが湧いた。

「そしたら康貴にいが誘ってくれるよ」

そのイメージは湧かない。

「大丈夫。そこは私に任せて！」

「そう……？」

まなみが言うなら信じてみようかな……。

「あれ？ でもそうなると次水着であいつと会うの？」

「試着を見せるんだから今更でしょ！」

「それはそうだけど……！」

なんなら今日下着まで見られてしまったけれど……。

思い出すだけで私の方は今でも顔から火が出るほど恥ずかしい。今日来るのを知っていたのに油断していた私のミスだから何も言えなかったけれど……。

だらしない格好を見て愛想をつかされていか心配だったが、それは大丈夫だったの
で恥ずかしさは後回しになっていたのかもしれない。

まなみが疑問符を浮かべる中、今更恥ずかしさで駆け回りたくなっていた。

「最後のゴールが決まったらお姉ちゃんも、まあ買い物くらいは大丈夫だよね？」

「そうね……」

それまではあくまで荷物持ちと割り切ればいい。最後だけなんとか頑張れば、次も遊べる。

「ふふ。楽しそう。お姉ちゃん」

本当に良い妹を持ったなど、改めて実感する。

水着を買って康貴から誘われるのを待つなら、それなら……。

「頑張ってるね、お姉ちゃん」

「うん……」

まなみには何かしつかり、お札をしてあげなきゃね。

「でね……その仕込みも含めて、デートは私が先になっちゃうけど……」

申し訳無さそうにまなみが言う。

「何を気にしてるのよ……」

「いいの？」

「いいわよ。しっかり楽しんでください」

「わーい！」

私ばかりが助けられるのもフェアじゃないと、ちやうどそう思っていたくらいだ。

続きは、
8月20日発売のファンタジア文庫で！

©SkyFarm, Aoru Kuzumachi 2020